

オルトンからチョートンまで

野村ヒサ

ロンドン滞在中のある日、ふと思立って、私はチョートンへ行ってみることにした。地図で調べてみると、オルトンから近いらしい。チョートンでジェイン・オーステンは35才の時から42才での死の三ヵ月前までのおよそ7年間を、母、姉との3人で、静かな年月を過ごした。女流作家ジェイン・オーステンが誕生したのも、このジェイン・オーステン・ハウスにおいてであった。家屋敷は金持ちの親戚へ養子に行った三番目の兄エドワード・ナイトが提供してくれたものである。

その家の居間を自分の眼で見たいというのが私の以前からの望みであった。オーステンの小説では、日常の家庭の居間が大きい役割を果たしている。たとえば「自負と偏見」のヒロイン、エリザベスにコリンズ氏が求婚するのは朝食後の居間である。また、ダーシー氏の伯母、キャサリン夫人がお金と地位をひけらかすのも居間である。また、「エマ」の冒頭で主要人物たちがいっきょに紹介されるのもハートフィールドの居間であるし、エルトン牧師が本性を現すのも、雪のクリスマスのウェストン家の居間である。また、「説きふせられて」のヒロイン、アンが再会した昔の恋人ウェントワースの他人行儀な態度に胸を痛めている時、彼女の背中から離れない甥を黙って抱き取ってくれるという彼のちょっとした親切に大きく心を動揺させられるのもマズグローブ夫妻（アンの妹夫婦）の居間である。こう見てくると、これらの居間はオーステン作品の上演される一種の劇場だと考えてもよいのではあるまいか。この居間はオーステンの意識の中で彼女自身の家の居間と何処かであつながっているとも考えられる。オーステン家の居間は近隣の親戚知人たちが訪れる場

所であり、同時にオーステン家の人々が手紙を書いたり針仕事をしたりする生活の場でもあった。夜には手仕事をしながら、声を出して読まれる新刊の小説に家族みんなが耳を傾ける場所でもあった。ジェイン・オーステンが人の来ない合間を縫って、小さな紙に小説を書きに腰をかける場所でもあった。彼女は自分の作品を家族に読んで聞かせることもあったという。この居間に入出入りする人々はイギリスの田舎の中流上層階級に所属するごく平凡な人々だった。その中には娘の婚約を聞いて、まっさきに婿の年収10000ポンドを思い浮べて有頂天になるベネット夫人や、噂話の好きなお人好しのオールドミスや、虚栄心でいっぱい母親もいた。要するにそれはイギリスの18世紀後半の中流階級の人の居間であった。言うまでもなく、オーステンの小説は客観化されたフィクションの世界であるが、そこに流れる普遍的な人間性と健全なヴァイタリティーを生み出す上でこの「居間」があずかった力は非常に大きいと言える。

ブリティッシュ・レイルのオルトン駅でローカル列車を下りると、下車した客は私をいれてたった三人だった。空は明るいのに冷たい雨がしとしと降っていた。

時計を見ると、11時ちょっと過ぎだったので、駅から徒歩1分ぐらいのオルトンハウスホテルへ行って（客は私一人だった）、「サンドウィッチと紅茶を下さい。」と勇気を出して頼んでみた。すらりとした中年の婦人が出てきて、「少しお待ち下さい。」と言い、「日本の方ですね。」と言う。数年前に日本から三人の人々が来て滞在し、チョートンの写真を撮って行ったと話してくれた。好意的な態度と上品なブリティッシュの発音に私はすっかり嬉しくなってしまった。奥で食器の触れ合う音がしている。待っている間に、壁に貼ってある紙を見てもなく見ていると、二週間前の日付けで、“Georgian Dinner”とか“pigeon pie”という語が目についた。1800年代初めには鳩を食べたらしい。ホテルの女主人にピジ

ヨンパイは美味しかったのだろうかとか尋ねてみた。「私は食べたことがないがあまり美味しかったとは思わない。」という答えが返ってきた。もっとも先日南洋のパラオへ行ってきた妹の話では、あちらでは蝙蝠が最高のご馳走のひとつだそうであるから、鳩など当たり前なのかもしれない。紅茶とサンドウィッチを運んで来たのは娘さんらしく、お母さん同様に上品な発音と物腰であった。古めかしいがちょっと贅沢なティーセットも、厚さに少しばらつきのあるサンドウィッチも私には興味深かった。味もまあまあだった。「ジェイン・オーステンの研究をしておいでですか。」とあちらから話しかけられて、私は少し驚いた。「ええ。」と答えた私は、チョートンまでの道順と距離について尋ねてみた。「バスはないが、歩いて一時間はかからないだろう。」と聞いて、私は歩いてみようかという気になった。それまでイギリスの田舎道を歩いた経験がなかったからである。ブリティッシュレイルの駅は大都市を除いてほとんど全部が町外れにあって、徒歩で行っては、道をたずねられそうな人に出会わないのである。

ちょうど正午ごろオルトンハウスホテルを出発すると、雨はすっかり止んで、陽がさしてきていた。車がびゅんびゅんとぼしていく広い道路の端を変な黄色人種のオバサンがこの歩いているのはサマにならないなとは思ったが、何事も経験だとばかり、時々草むらに踏み込んでブーツを濡らしたりしながら、教わった道をチョートンへむかって歩いた。葉をすっかり落とした高い木の上に鳥の巣がいくつもみえる。鳥まで身体も声も日本のものより大きい。

たぶんワタリガラスという種類であろう。ブロンテカントリーの教会裏の墓地でも多数見かけた。傍で見ると50センチほどの体長で ちょっと気味が悪い。

なだらかな美しい緑の丘を見渡して、思わず深呼吸をした。またしばらく歩いてチョートンの近くに来ると、ロングボーンとかダーシーとか

ビングリーといった小さな立て札が目付いた。イギリス人はユーモアのセンスがあるとつくづく思った。

チョートンのジェイン・オーステン・ハウスに着いたのは午後一時近かった。わくわくしながら見回すと、庭はきれいに手入れされて花がたくさん咲いて居り、庭木戸はペンキ塗り立てであった。(この木戸のかすかな軋みの音を聞くと、オーステンは書きかけの小さな紙切れをそっと隠したものだということ記事をどこかで読んだことがあった)。家の中へ入ると、階下のホールはたいして広くないし、おまけに土産物売場があって、ちょっと期待はずれだった。古い質素な木の床はかなり磨り減っていた。二階への階段も本当に質素な木製で、ホールの床同様磨り減っていた。二階の居間の壁には白っぽい小さな花模様の壁紙が貼られていた。何ということもない部屋で、椅子やテーブルもかなり質素なものであった。私は「このテーブルで（机を使わなかった）オーステンはあのすぐれた小説を書いたのだ」と思うと、感慨のようなもので胸がいっぱいになった。

まだ42才の若さで、副腎の病気が徐々に進行していたようで、耐えられないほどだるい時は、居間の長椅子に横になっていたと言われている。非常に我慢強い性格でかなり病気が進行するまで家族の者は誰も気付かなかったそうである。姉に付き添われて馬車に乗り、ウィンチェスターの医師の家へ行ったのは、死の三ヶ月ほど前であったという。小雨そぼ降る午後、オーステン姉妹の乗った馬車の後には、兄のエドワードが馬に乗って付き添っていたという。

チョートンのジェイン・オーステン・ハウスを訪れてから約二週間後、私はWinchester Cathedralの中にあるオーステンの墓に詣でた。